

国史纂集

第17号

別府大学文学部
日本史研究室
〒874別府市北石垣
電 (0977) 67-0101

速見郡立石村のごとども

佐佐藤 重巳

別府市の観海寺・堀田一带は、近

と思われる。

世期をとおして、速見郡立石村と呼ばれた。現在の「南立石」などの地名は、その立石村の遺跡である。

慶長五年（一五〇〇）、関ヶ原の

元和八年（一六二二）の「立石村

戦いのうち、細川忠興が、豊前八郡および豊後の国東・速見の二郡の領主に任じられ、細川領が成立したが

人畜御改之帳」によると、「萩原殿御知行、高五百六十石、（中略）男

彼は、甥の萩原二位兼従に、速見郡内の千石を分知し、ここに萩原氏の

女一四七人」と見えており、「朱印高」は千石と見えるものの、元和時

立石領が誕生した。兼従は、細川忠興の妹祿世と神道家の吉田左近衛佐

点で、既に、五百六十石に減っている。周知の如く、立石村の中には朝

善治との間に生まれた人物であり、忠興からの分知は、慶長末期のこと

万治二年（一六六〇）兼従が死去

◆ 速見郡立石村のごとども………	後藤重巳
◆ 歴史と民俗資料 ……高宮京子	
◆ 山林・狩猟儀礼における山の神………七森寛子	
◆ 山村生活史………枝木勝茂	
◆ 豊州佐伯藩祖毛利伊勢守高政について………毛利直人	
◆ 源平の争乱と豊後国国見地方………森 猛	

し、所領は、息子の三位真従に相続されたが、員従が、宝永七年（一七一〇）に死没すると収公され、幕府領（天領）になった。

さて、「立石村」の領域は、現在の乙原境から、観海寺・堀田に及ぶ地域であった。

菊池寛の小説「忠直卿行状記」で知られる松平忠直が、越前福井藩七

平成三年三月、本学史学科の近世史研究会の手で刊行された「速見郡

五万石を除封され、豊後に配流になったのが元和九年（一六二二）。慶安三年（一六五〇）に死去、その間

立石村、細川越中守様御検地帳写、田方反別番付帳」（原本・史学科所蔵）は、この立石村内の田畑耕地の様態を、詳細に伝える貴重な史料である。

「賄料」（生活費）として、大分・速見郡内に、五千石を与えられていたが、速見郡内分は、北石垣村と龜

この「反別番付帳」によると、村内は、「大字」と考えられる次の「筋」と「通」から成っていた。

川村の一五〇〇石であった。忠直の死去後、これらの「賄料」地も幕府に収公された。

温水筋（ぬくみ筋）
はなつら筋
井手の内通

因みに、大分銘菓「二伯」は、忠直の号名に由来するものである。

せいり本筋（瀬人本九）
山田筋
内川湯の前筋

上ノ田つがの尾筋

乙原中間通

みどりの原筋(御堂)

堂園田筋

本村通

たい筋(田井あるいは台カ)

川くぼ井手通

堀田の前通

杉戸ばば筋(杉戸馬場カ)

板地通

「温水筋」以下、「筋」と付くも

の一〇、「井手の内通」以下、「通」

と付くもの六である。

これらの「筋」や「通」の中に、

さらに「小字」が多く記載されてい

る。

たとえば、「温水筋」には、山の

口・冷水谷・山の神・冷水・温水・

ひらだ・せとの本・いだ・ほきの下

などの九小字が見えている。また、

「はなつら筋」には、堀田の口・つ

か畑・堀田だ・はなつら・梅の木田

ぢごく谷・湯の向道より上・湯の向

湯の向谷などがあり、「温水筋」の

大字名は「温水」、「はなつら筋」

の名は、「はなつら」の小字から名

付けられていることが知られる。

「番付帳」は、大字内に散在する

田畑耕地の一筆ごとに、地番を付し

たもので、これによって、大字内の

田畑筆数を知ることができる。

大字ごとの耕地の総反別は、未記

載であり、集計する必要があるが、

各大字内の田畑屋敷筆数を、表で示

すと次の如くなる。

大字名	筆数
温水筋	五一
はなつら筋	三三
井手の内通	一九
せいり本筋	二八
山田筋	一一
内川湯の前筋	四五
上の田つがの尾筋	四
乙原中間通	二四
みどりの原筋	二九
堂園田筋	五六
本村通	二二
たい筋	三三
川くぼ井手通	三六
堀田の前通	八七
杉戸ばば筋	四一
板地通	一三

井手の内筋・山田筋・たい筋(台

カ)などは、百筆を越す田畑から成

っているが、このうち、たい筋を除

く二大字は、各筆ごとの反別が微細

であるため、必ずしも総反別が大き

なことを意味しない。一方、たい筋

は耕地の反別が大きく、立石村中で

は最も地利に恵まれた大字であった

ものと思われる。

これらの大字名で、現在小字名と

してのこっているものに、温水・花

ツラ・御堂原・堀田・湯の向・井手

ノ内・本村・山田・板地・上の田・

つかの尾・中間・内川などがある。

現在の上の田・つかの尾は「番付帳」

には、「上の田つかの尾筋」とあり、

中間は「番付帳」に記載される「乙

原中間通」の中間を指すものと思わ

れる。たい筋は現存の台であろう。

「地番帳」の記載中には、至る所

に「古来川欠」・「古来崩れ抜け」

「古来崩れ入り」・「古来山崩れ」

「皆荒」などの注記が各所に見られ、

先述の如く、地滑り多発地帯の耕地

の景観をよく物語っている。

この史料は、また子細に分析を終

えていないが、その作業の結果によ

っては、近世期の立石村の復元が可

能になろう。

特に、村中の大字地名が、「筋」

と「通」で統一されている点など、

現地調査を通して、精査すれば、新

しい発見が、期待されるかもしれない。

(文学部教授)

歴史と民俗資料

高岡宮 古京子

一、はじめに

「民俗資料」とは、知識として民

間に伝承しているものと、その担い

手である庶民の所産であって私たち

の昔からの生活を知るためには欠く

ことのできないものでもある。この

ような民俗資料は民俗文化財とも言

われ無形のものとの有形のものに分

けられる。これは、私たちの祖先の

生活の中から築きあげられてきたも

のであり、その地域の歴史と深いか